Fig 4
迫田遺跡１トレンチ調査状況
水道管埋設予定地より、土器集中廃棄所が出土した。
（写真手前が南）

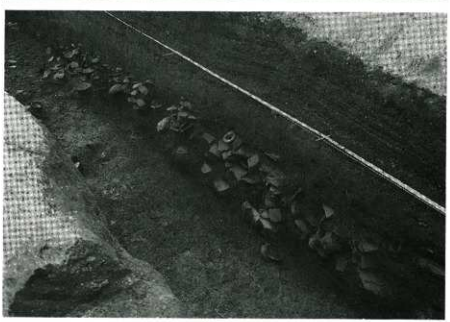


Fig 5
グループ３
土器集中廃棄所西側断面の状況

Fig 6
軽石製除石出土状況

Fig 7
グループ3
土器集中廃棄所断面の状況

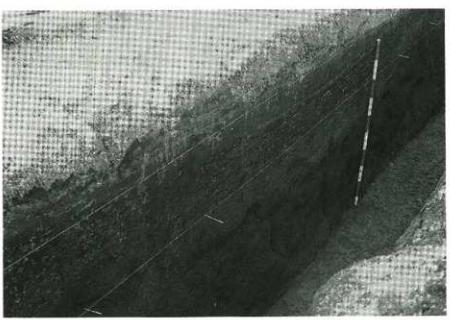


Fig 8
溝状遺構断面の状況(1)

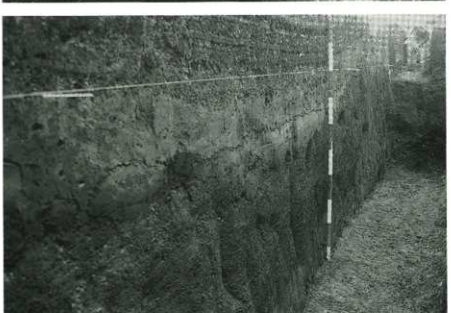


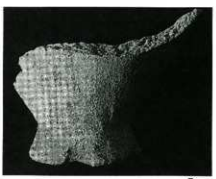
Fig 9
溝状遺構断面の状況(2)

1

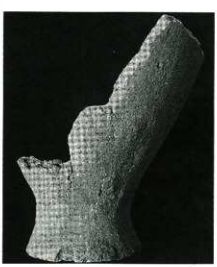
2

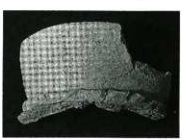
3

4

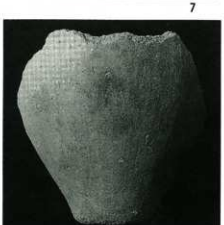

5

6


7


8

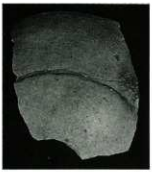
9


10

11

12

Fig10


13

14

15

16

17

18

19

20

21

22

23

24

25

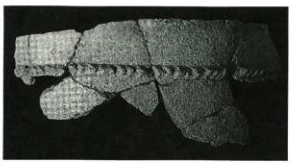
26

Fig11

27

28

30


29

31

32

33

34

35

36

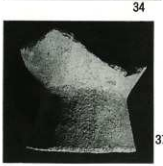
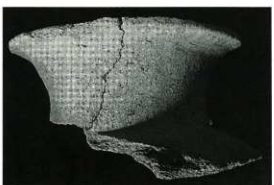

37

Fig12

38

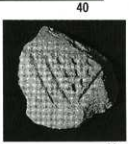
39

41

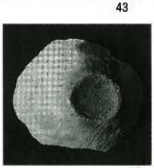

40

42

43


44

45


46

47

48

49

Fig13

50

51

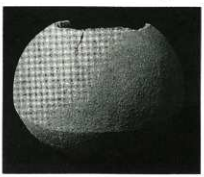
52

53

54

55

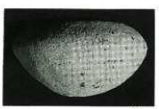
56


57

58

59

60


61

62

63

64

Fig14

65

66

67

68

69

70

71

72

Fig15

敷領遺跡編

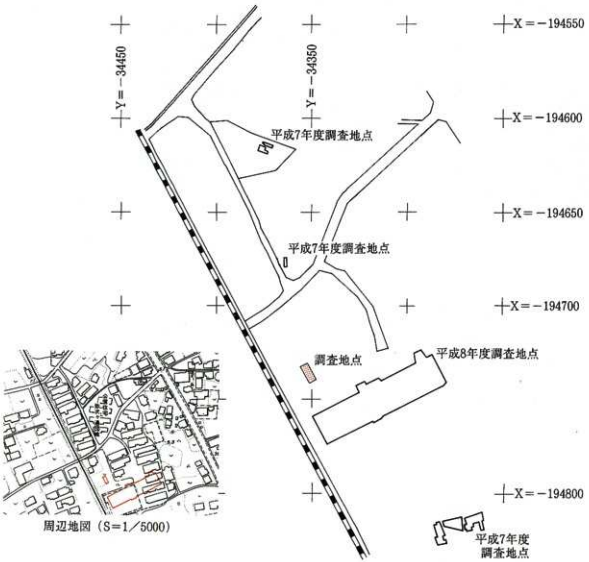
第１章　遺跡の位置と環境

敷領遺跡は，指宿市十町小字敷領周辺に広がる弥生時代～平安時代にかけての複合遺跡である。
遺跡は，指宿市街地が形成されている火山性扇状地のほぼ中央，海抜約４～６ｍの標高にあり，火山災害遺跡として知られる国指定史跡指宿橋半礼川遺跡の北約2kmの地点に位置する。遺跡のある扇状地は，北西にある二反田川の支流と，南側に流れる柳田川に囲まれている。現在住宅が立ち並び，畑も点在する程度の景観をなしているが，戦後までは水田が広がり，雨期には水田が水没するほど水捌けの悪いところであった。

敷領遺跡の発見は比較的古く，明治34年に壺形土器等が採集されたことによる。その後も大正13年に弥生土器や成川式土器，打製石斧等が表採され，遺跡の存在が知られるようになった。敷領遺跡の周知の遺跡の範囲は下図のとおりである。これには指宿市誌で公開された敷領遺跡、中敷領遺跡、下敷領遺跡の3遺跡が含まれているが、表採遺物が共通していることや地形の状況から一連の遺跡と推定されるため敷領遺跡としてまとめて表記している。

なお、平成7年度に遺跡範囲確認調査を、平成８年度には公営住宅建替えに伴う発掘調査を実施し、平安時代874年の開聞岳噴火で埋没した水田や畠跡、奈良～平安時代の建物群、古墳時代の集落の一部、弥生時代中期の住居跡など多種多様な遺構を検出し、遺跡の概要がつかめてきている。

今回は、平成8年度に実施した調査地点の北側隣接地に5×10ｍのトレンチを設け、弥生時代の包含層まで探査した。



第24図　調査地点位置図(S＝1／2,000)

第2章　確　認　調　査

第1節　調査の概要

(1)　調査の概要

調査期間　　平成9年7月2日～9月30日

調査面積　　50㎡

平安時代の埋没水田、奈良～平安時代の建物群の広がりを把握するために、50㎡のトレンチを設定し、確認調査を実施した。現地表下約40㎝のところで、紫コラを確認し、その下層から水田跡を検出した。平面の実測については、㈶埋蔵文化財サポートに写真実測を依頼し図化を行った。青コラ上面において、奈良～平安時代の柱穴群を検出したが、調査範囲内では明確にプランを認識できるものがなかった。弥生時代の包含層上面で古墳時代の包含層を埋土とする柱穴群を検出し集落の広がりを確認できた。いずれの包含層からも遺物の出土はみられなかった。

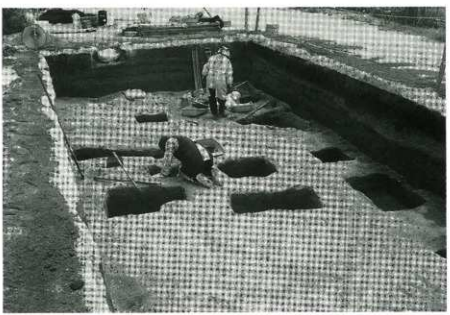


Fig16
青コラ上面の柱穴探査状況

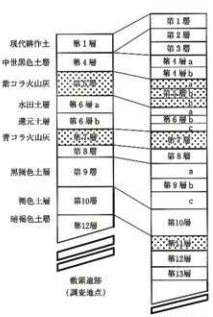
(2)　層　位

敷領遺跡の層序は、基本的には橋牟礼川遺跡の標準層序と同様である。第5層の紫コラ火山灰、第7層の青コラ火山灰が鍵層となり、奈良～平安時代、古墳時代の包含層をパックしている。

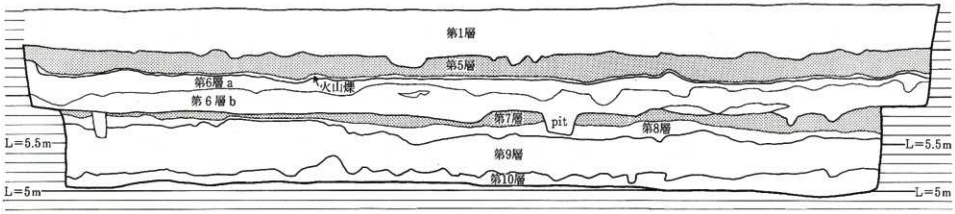
今回の調査で、第1層、第5層、第6層、第7層、第8層、第9層、第10層の8層を確認した。

第5層の紫コラ上面は現代の耕作によって削平されている。最下層には火山礫層が堆積しており、第6層の水田を被覆している。

第6層は上部の水田層と下部の遺元土層に細分できる。第7層の青コラは10㎝前後の堆積で下層にはスコリアの混在する第8層が堆積している。第9層は60㎝前後の堆積で、下層の第10層と不整合が認められる。



第25図　層位模式断面図



第26図　西壁層位断面図(S=1／40)

(3) 遺構について

① 874年3月25日の開聞岳噴火で埋没した水田

紫コラの直下から水田を検出した。調査区をほぼ南北方向に走る畦Aと東西方向に走る畦の2本の畦Bが確認でき、それぞれの伸びる方向から調査区外で直交、あるいは直角にぶつかるものと考えられる。

畦Aは、幅20cm、高さ15cmの断面台形状を呈するものが並行して2条走り、途中で1本の大畦となっている。ほぼ南北方向に走っていることから水田の区画の基準的な役割を果たしている畦の可能性も考えられるが調査範囲が狭いために断定はしがたい。また、2本の畦が隣接して走っているが、真ん中の凹んだ部分については、杭や板材などで仕切を設けた痕跡は確認されなかった。畦Bは、途中で畦がとぎれる水口部分を持つもので、幅15cm、高さ15cmを計り、断面は台形状を呈す。

水田面は大きな傾斜はなく、フラットな状況を呈するが、小さな凹凸が著しく、一部に楕円形状の凹みの並びを看取できる。平成7年度の調査では、この凹みが、畦に並行することから農作業に伴う耕具痕跡の可能性が指摘されている。今回の調査でも畦Aに沿うように楕円形の凹みが検出されており同様の可能性が考えられる。

その他、畦の方向とは関連のみられないような凹みもあり、足跡の可能性も考えられたが、形状が不定形であり判断しがたい状況であった。

② 青コラ上面で検出した奈良～平安時代の柱穴群

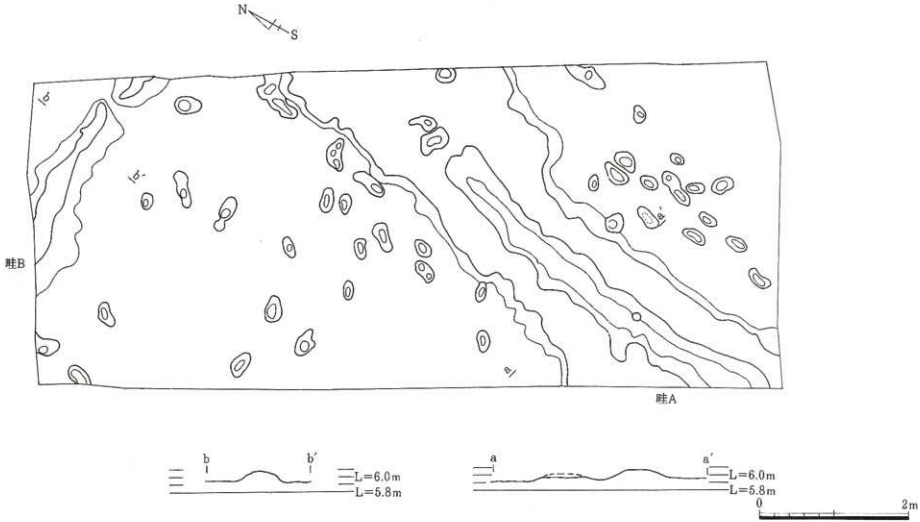
平成8年度の調査では、青コラ上面において奈良～平安時代の2間3間の掘立柱建物跡3棟、2間2間の総柱建物跡1棟、竪穴住居1基を検出した。その他、多量の須恵器や土師器、「備」「智」と書かれた墨書土器などの遺物も出土し、何らかの政治的機能をもった施設群の性格が指摘されていた。

本調査地点からも、28基の柱穴を検出したが、調査範囲が狭く確実にプランを形成するものは検出できなかった。しかし、等間隔で直線上に並ぶ規格性をもったものもあり、前回の調査成果を踏まえて考えると、建物遺構群の広がりの一端を捉えたものと推量される。柱穴は、おおむね直径20～30cm前後、検出面からの深さ40cm前後を計る。それぞれ柱穴の法量については、下表にまとめた。

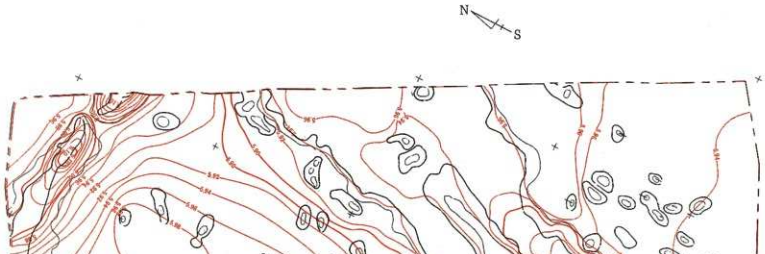
なお、第6層中から遺物の出土はみられなかった。

表－7　奈良～平安時代柱穴法量表

No.	長　径	短　径	深　さ	No.	長　径	短　径	深　さ
1	57	41	63	16	26	23.5	32
2	34	30	48	17	36	27	29
3	34	31.5	54	18	35	27	24
4	27	23	81	19	27	22.5	23
5	29	24	31	20	27	20	32
6	31	27	53	21	27	24	47
7	59	41	82.5	22	30.5	27	43.5
8	51	43	28	23	21	19	30.5
9	24	22	34	24	25	18	50.5
10	28	23	31	25	33	28	28
11	41	26	64	26	23	22	84
12	30	24	53	27	24.5	23	36
13	29	21	36.5	28	41.5	28.5	35
14	33	31	68	29	31	25	10.5
15	32	30	37	30	36	27	14.5

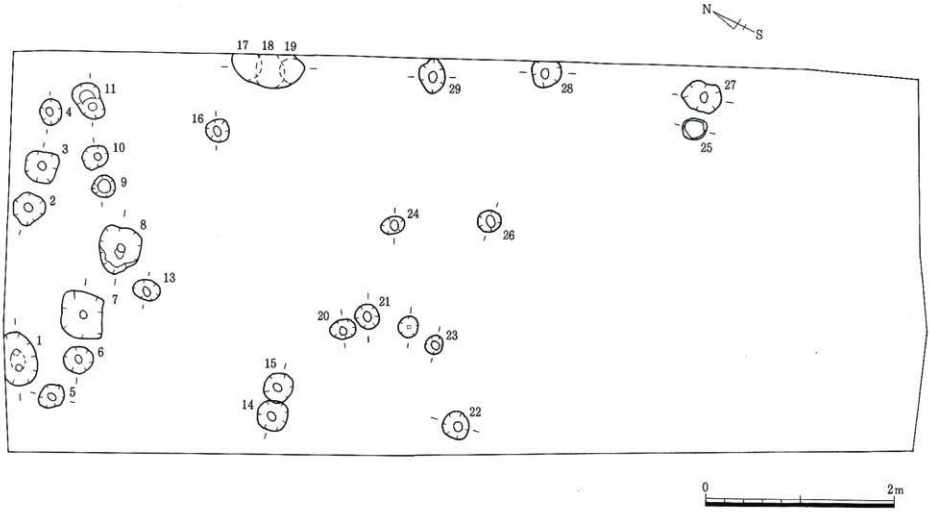


第27図　水田跡平面図(S=1／50)

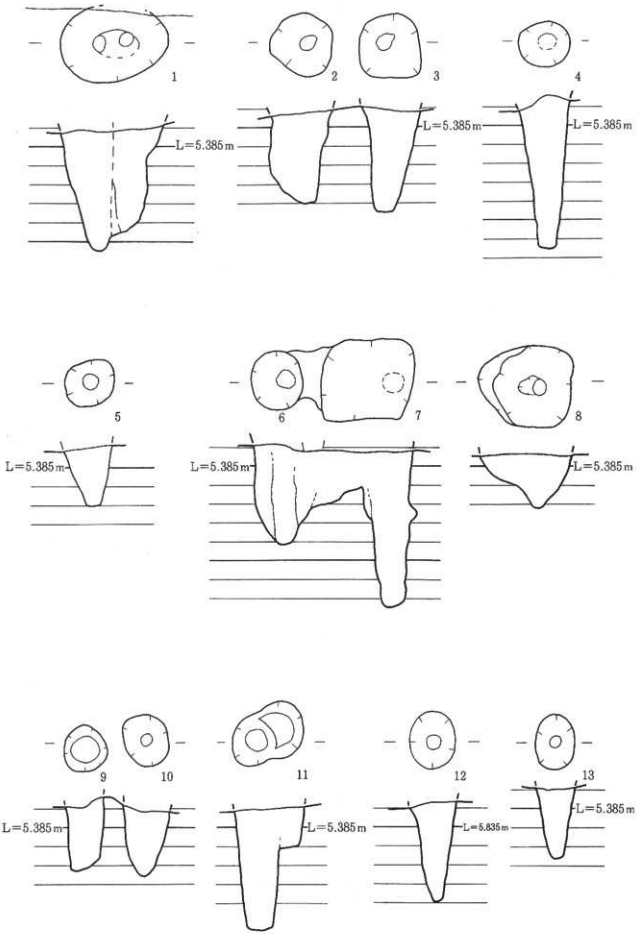


0 2m

第28図　水田跡２㎝コンタ図(S＝1／50)



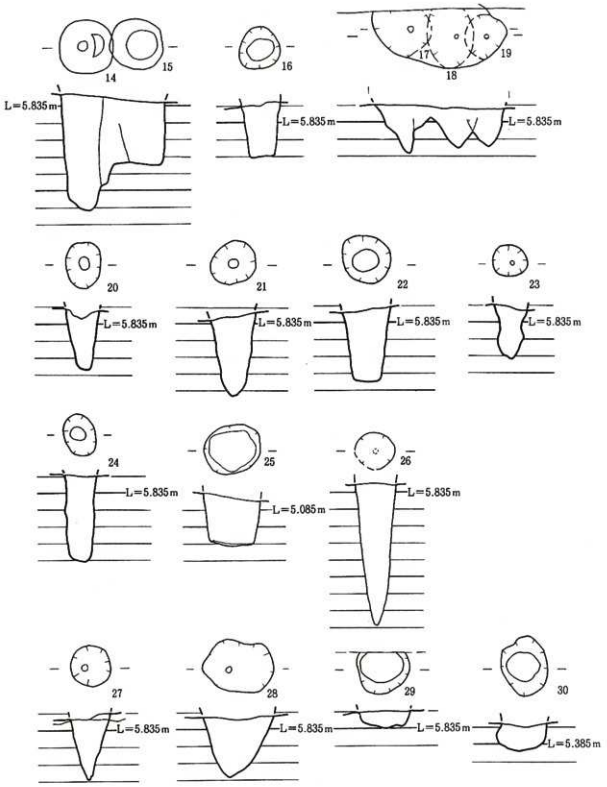
第29図　奈良～平安時代柱穴検出状況図(S=1／50)



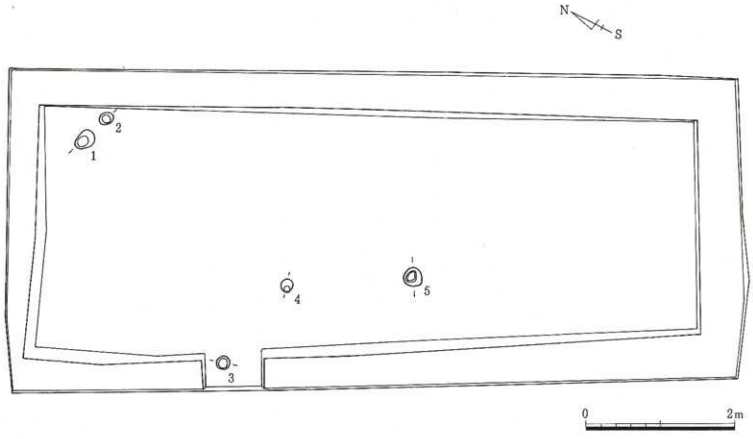
第30図　奈良～平安時代柱穴平面図・断面図①(S=1/20)

④　古墳時代の柱穴群について

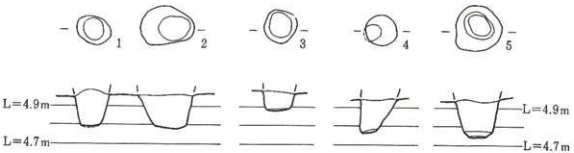
第10層の上面で第９層を埋土とする柱穴４基を検出した。調査範囲内では、プランを確認できるものがなかった。平成８年度の調査では、今回の調査区の約30ｍ南側から、竪穴住居や夥しい柱穴群が検出されているため、その集落内の遺構にあたるものと考えられる。それぞれの柱穴の法量については下表にまとめた。なお、第９層中から遺物の出土はみられなかった。



第31図　奈良～平安時代柱穴平面図・断面図②(S＝1／20)



第32図　古墳時代柱穴検出状況図(S=1／50)



第33図　古墳時代柱穴平面図・断面図(S=1/20)

表－8　古墳時代柱穴法量表

No	長　径	短　径	深　さ
1	19	14	19
2	28	20	12.5
3	18	17	10.5
4	16	16	18
5	25	24	20

(4)　まとめ

今回の確認調査で、平安時代の水田、奈良～平安時代の柱穴群、古墳時代集落の広がりの一端を確認することができた。

水田については、区画の基軸線の可能性も考えられる大畦が検出された。周辺におけるこの畦の状況を把握することが、当時の水田区画を検証する上で重要な課題の一つであろう。

奈良～平安時代の柱穴群については、プランを確定できるものがなかったが、今後周辺地区のさらなる探査によって、遺構群の広がりと性格をより詳細に把握できるものと考えられる。

敷領遺跡は弥生時代～平安時代に至る複合遺跡であり、文化内容の変遷を追うことが可能な遺跡である。特に古墳時代～奈良・平安時代に至る文化内容の変遷について、橋牟礼川遺跡同様、律令制度の波及の度合を考古学的な側面から検討できつ豊富な情報を有する遺跡であると評価できよう。

SUMMARY

Shikiryo-archeaological site is located in Ibusuki City on the southern most tip of Kyusyu. The first excavation of this site by Ibusuki Board of Education began in 1995. We found rice fields that had been buried by the 874 A.D. eruption of Mt. Kaimondake in this excavation.
With the rebuilding of public housing, we had to excavate on 1,132 m² on this site. We reconfirmed our data, and also discovered some new information about the size of the ridge, the area of one rice field, how to the rice field was made, and so on. In addtion, We found some ruins of shacks and of many pottery bowls, which had Chinese characters. The fragments of ink stone were from the Nara period to the Heian period. This evidence suggest the exeistence of some public facilities in this place. We found a part of the village from two periods, 2 dwelling pits from the Kofun period and I dwelling pit from the Yayoi period. One dwelling pit from the Kofun period was possibly burned down because we found many timbers which were carbonized. The dwelling pit from Yayoi period is the 3rd discovery in the Satuma peninsula. Therefore, The Shikiryo-archeaological site is considered an important site in which we can understand the change of life style from the Yayoi period to the Heian period.

(original Tetsuya Watanabe, proof-reading Basalaj Nikolai Piper)

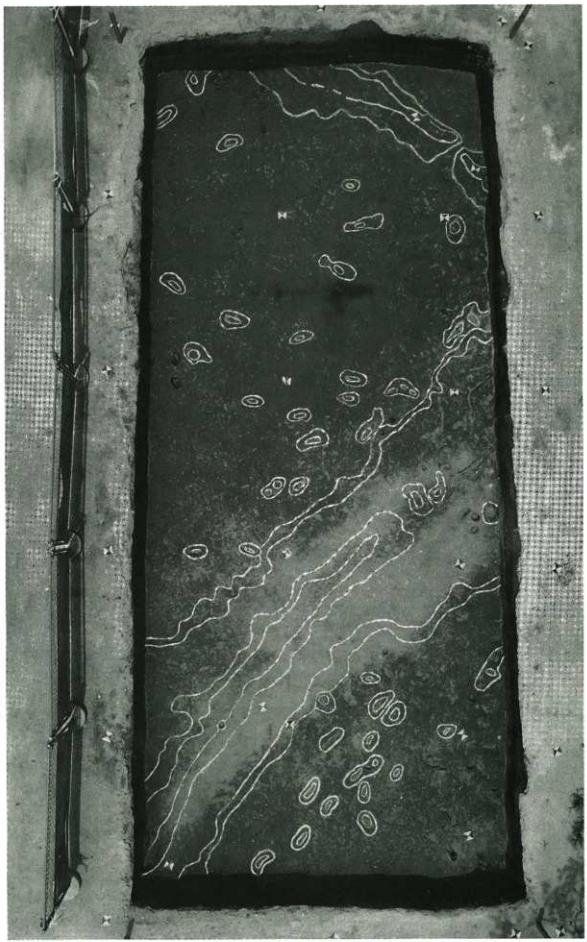


Fig 17 水田平面

Fig18
水田検出状況　畦A

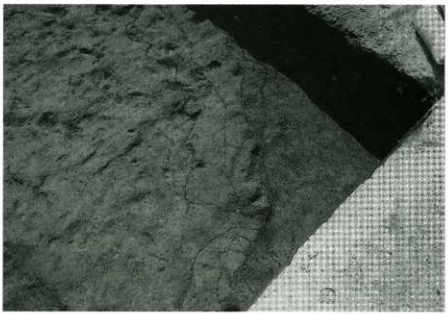


Fig19
水田検出状況　畦B

Fig20
畦A断面と水田層の状況

Fig21
青コラ上面柱穴検出状況

Fig22
調査区土層の状況

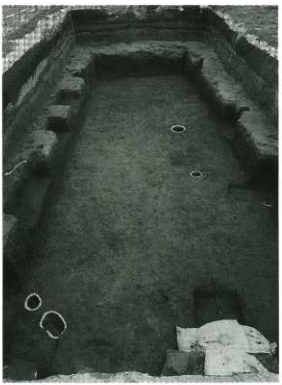


Fig23
古墳時代柱穴検出状況

報 告 書 抄 録

ふ り が な	はしむれがわいせき
書　　名	橋牟礼川遺跡Ⅻ
副 書 名	橋牟礼川遺跡範囲確認調査報告書
巻　　次	13
シリーズ名	指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第26集
編 著 者 名	渡部　徹也・鎌田　洋昭・下山　覚・中摩浩太郎
編 集 機 関	鹿児島県指宿市教育委員会(指宿市考古博物館 時遊館COCCOはしむれ)
所　在　地	〒891-0403 鹿児島県指宿市十二町2290 TEL 0993－23－5100
発行年月日	西暦１９９８年３月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
橋牟礼川遺跡 1トレンチ (南丹波遺跡地点迫田遺跡)	指宿市 指宿市十二町南丹波	46210	2－92			19970710～ 19980331	50	範囲確認調査
1トレンチ	〃					19971102～ 19980331	70	
2トレンチ	〃					19971118～ 19980331	10	
3トレンチ	〃					19971130～ 19980331	10	
敷領遺跡	指宿市十町敷領		2－89			19907107～ 19980331	50	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
橋牟礼川遺跡 1トレンチ (南丹波遺跡地点)	生産遺跡	平安時代	畠跡		
迫田遺跡 1トレンチ		弥生時代 終末～中世	中世階段状遺構 弥生時代終末～古墳時代の祭祀遺構	成川式土器，石器	
2トレンチ	集落跡	古墳～ 平安時代	杭列跡	成川式土器	
3トレンチ	〃	古墳～近世	近世建物跡 古墳時代柱穴群	成川式土器	
敷領遺跡	生産遺跡 または 集落跡	平安時代 古墳時代	ピット状遺構 土壙	成川式土器	
	生産遺跡	平安時代	水田跡		西暦874年3月25日に噴火した開聞岳の火山灰により，埋没した災害にあった水田跡。

橋牟礼川遺跡XIII

平成10年3月

発行　鹿児島県指宿市教育委員会
指宿市十町2424
☎0993－22－2111

印刷所　中央印刷株式会社
鹿児島市春日町12番16号
☎099－247－3300